

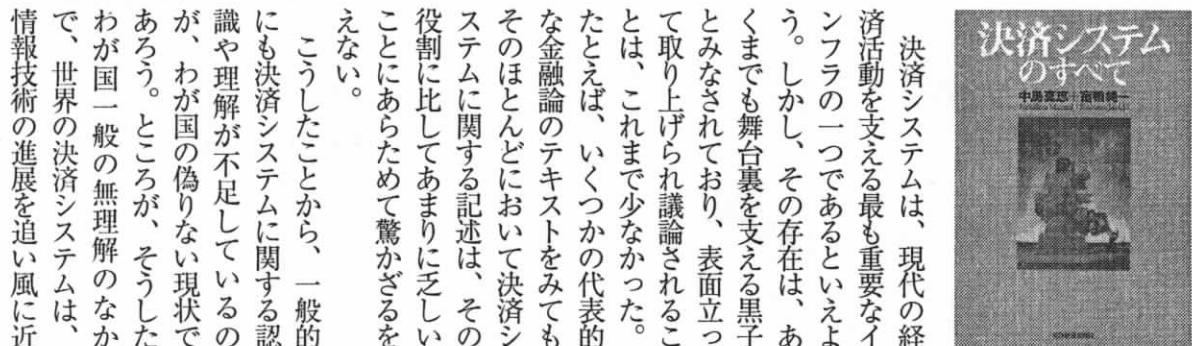
三言評

『決済システムのすべて』

中島真志・宿輪純一 著

決済システムに対する理解不足を払拭

決済システムは、現代の経済活動を支える最も重要なインフラの一つであるといえよう。しかし、その存在は、あくまでも舞台裏を支える黒子とみなされており、表面立て取り上げられ議論されることは、これまで少なかつた。たとえば、いくつかの代表的な金融論のテキストをみても、そのほとんどにおいて決済システムに関する記述は、その役割に比してあまりに乏しいことであらためて驚かざるを得ない。



こうしたことから、一般的にも決済システムに関する認識や理解が不足しているのが、わが国の偽りない現状であろう。ところが、そうしたわが国一般の無理解のなかで、世界の決済システムは、情報技術の進展を追い風に近づいており、決済システムに対する理解不足を払拭し、的確な認識を形成するため、広範囲の読者に本書を薦めたい。

内容的には、第一章から第四章にかけて、まず決済システムのプロセスや決済リスク、ネット決済システムとRTGSシステムの相違などが要性に関する認識不足は、大目にみられることが多い。しかし、決済システムの重要性に関する認識不足は、決済システムのトレンンドと、決済システムのトレンンドとその背後にある要因が解説されることにつながるという意味で、許されないと悟るべきである。こうした状況において、われわれの蒙を啓くべく、格好のタイミングで出版されたのが、本書である。

本書は、著者たちが「決済の基本書」を目指したとしているように、決済システムに関する基礎知識や理論を平易に解説しており、決済システムを体系的に理解するうえで役立つものである。そこで、最後に第九章で、今後の決済システム改革の方針性や、クリアリングバンク、決済専門銀行などの新しい動きについて述べている。

その際、本書には、図表がふんだんに盛り込まれ、さまざまな決済システムの全体像がビジュアルに把握できるよう工夫されている。

著者は、中央銀行業務にパックグラウンドをもつ中島氏と都銀での決済の実務・企画の経験を豊富に有する宿輪氏との二人であり、両者のこれ

までの研究成果や実務経験が融合したことが、本書のような書物の執筆を可能にしたと考えられる。さらに、執筆にあたっては、海外の中央銀行や決済システムの運営主体、有力行などでの詳細な調査が行われており、そうした努力には敬意を表したい。

本書は、その内容から、いわば「決済システム白書」だと評価できる。それゆえ、欲をいうと、今後とも毎年あるいは隔年ごとに、内容のアップデートを図つていってほしいものである。こうした作業は、著者たち個人の手だけではなく、これだけ変化が急速ななかにおいては、継続的な改訂は本書の意義を維持するうえで不可欠だと考えられる。

(著者の中嶋氏は金融情報システムセンター調査企画部長、宿輪氏は三和銀行決済業務部部長)

（慶應義塾大学経済学部教授 池尾 和人）